

熊野古道の石敷き

Ancient pilgrimage routes leading to sacred sites for rebirth "Kumano-kodo"

# 甦りの聖地を巡る「熊野古道」

## 和歌山県、奈良県、三重県

Special Features / Civil Engineering Heritage XI



パシフィックコンサルタンツ株式会社/事務管理本部/総務部  
大日方佳奈子(会誌編集専門委員)  
OBINATA Kanako

特集  
土木遺産 XI  
家族で楽しむ土木遺産

### 祈りの道 熊野古道

一千年もの昔、平安時代の上皇が幾度となく参詣し、時代を経て多くの人々が「蟻の熊野詣」と称されるほど列をなして訪れた甦りの聖地熊野。険しい山岳地帯を横断し、紀伊半島全域から霊場熊野三山を訪れるための参詣道が「熊野古道」である。

本州最南端の紀伊半島に位置し、その大部分を占める紀伊山地は、和歌山県、奈良県、三重県にまたがり、標高1,000~2,000m級の山脈が縦横に走る。山域が海岸に迫っているため平野は少なく、年間の降水量が3,000mmを超え、温暖多雨な気候が深い森林を育てている。

なぜこのような険しい山岳地に、古の人々は祈りの道を整備していったのだろうか。

### 神々が鎮まる場所

熊野は『古事記』や『日本書紀』にも登場し、死者の霊がこもる黄泉の国とされ、神々が鎮まる特別な場所として崇拜されてきた。川や滝、岩山や大木などが、太古の

人々に神の存在を感じさせ、日本独自の自然崇拜に基づく信仰である神道が生まれたのである。そして、その後伝来した仏教や、神道と仏教を融合させた修験道などの多様な信仰を育んだ紀伊山地には、それぞれの起源や内容の異なる「吉野・大峯」「熊野三山」「高野山」の三つの山岳霊場が生まれた。それ故に、京の都にすむ人々は太陽の光が差してくる南の方角を聖なるものと考え、京都から極楽浄土を意味する真南に位置する紀伊半島は、神仏の住む場所とされていた。

### 熊野三山のパワー

熊野三山とは熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社の3社と青岸渡寺、補陀洛山寺の2寺の総称である。本宮大社は紀元前33(崇神天皇65)年の創建と言われ、主祭神は樹木を支配される神であったため「紀の国(木の国)」の語源ともなっている。速玉大社は巨石崇拜、那智大社は滝崇拜に起源しているが、平安時代に成立した仏や菩薩が神に形を変えて現れると説いた本地垂迹説



図1 熊野古道と熊野三山

の影響を受け、お互いの神を祀りあって別名「熊野三所権現」として日本第一の霊験所となった。

本宮の神は来世のご加護を約束してくれる阿弥陀如来、速玉の神は現世の苦しみや病を癒す薬師如来、那智の神は前世の罪悪解消を約束してくれる千手観音として崇拜され、熊野三山を参詣すれば現在、過去、未来にご利益があるとされた。

聖地「那智山」へと続く高低差約100mの大門坂は、樹齢800年と言われる夫婦杉の巨木を登り口に配し、趣のある石段が約600m続く。その途中で、はるか遠くに那智大滝を望みながら、実際に古の人々が辿った石段を登り熊野三山を目指し歩くと、大なる自然の癒しと底知れぬパワーを肌で感じる。パワースポットという言葉が最近よく耳にするが、「その場にいるだけで精神的な力がみなぎったり、リラックスできたりする場所」を指すのだそう。神話の時代から人々が感じた熊野の力は、現代にも通じ多くの人々を魅了する。



写真1 熊野本宮大社

### あらゆる人々を受け入れる神

熊野が甦りの地とされていたのは、黄泉の国に足を踏み入れ、一度死んで魂を清め、熊野から出る頃には再生を果たすという思想があったためである。この熊野信仰が広く知られるようになったのは、平安時代(794~1192年)に始まった天皇を退いた上皇や貴族による熊野御幸と呼ばれる熊野詣の影響が大きかった。白河・鳥羽・後白河・後鳥羽上皇の院政期が中心で、約100年間に100回近い熊野御幸が行われている。自らが険しい山道を歩くことで修業を積み、その困難が多いほど熊野の神々の救いも大きいと考えられていた。道案内人は必ず先達と呼ばれる修験者(山伏)がつとめ、険しい修行の道を選び、道中の作法の指導なども行った。1201(建仁元)年10月に後鳥羽上皇の熊野詣に随行した歌人、藤原定家が記した旅行記『熊野御幸記』には、当時の日程や道順、様々な崇拜行事、命の危険を感じながら険しい熊野の山岳地を巡る修行の行程が克明に記されている。

鎌倉時代末期に入ると、一遍上人を開祖とする時宗の念仏聖たちが、熊野を特別な聖地として伝え、武士階級や庶民へと信仰を広めた。熊野三山は、老若男女、身分、浄不浄などを一切問わず、あらゆる人々を受け入れる神であったため、多くの信者が救いを求めて熊野へと導かれていった。

日本最大の霊場として栄えていたが、江戸時代になると紀州藩の宗教政策によって山伏や念仏聖が抑圧されたことで信仰は衰え、1868(明治元)年の神仏分離令によって熊野を詣でる人は減っていったのである。

### 信仰の道 熊野古道のルート

熊野古道はいくつかの大きなルートがある。

京の都から熊野三山までのメインルートが熊野御幸の公式参詣道となっていた「紀伊路」、途中で紀伊田辺から東に向かい紀伊山地に分け入る「中辺路」、そして紀伊田辺から海岸線を南下する「大辺路」に分かれる。中辺路は熊野三山を目指すために最も頻繁に使われていたル



写真2 熊野速玉大社



写真3 熊野那智大社の神とされる那智大滝

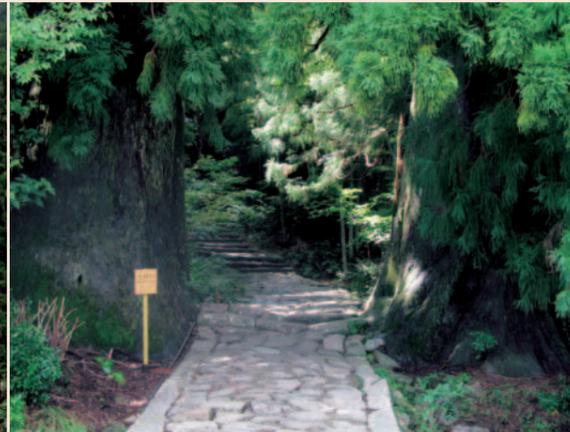


写真4 樹齢800年の大門坂の「夫婦杉」

ートで、途中、熊野川の船便を利用するが、大部分は険しい山岳道であり、熊野神の御子神を祀った「王子」が点在するのが特徴である。大辺路は中辺路に比べて距離が長いが景色が美しく、江戸時代には文人墨客が好んで利用したと言われている。

紀伊半島中央部を南北に縦断し、高野山と熊野を最短距離で結ぶ「小辺路」。修験者により切り開かれたといわれる最も険しい山岳道は、標高1,000mを超える3つの峠を越えて熊野本宮大社に至る。

伊勢と熊野を結び紀伊半島東岸を南下し、主に東国からの参詣者が利用した道「伊勢路」。平安時代中期にはすでに開かれていたが、当時は中辺路が中心ルートであったため、伊勢神宮と熊野を詣でる庶民の西国巡礼が盛んになった江戸時代に利用者が増えていった。

### 熊野古道の構造と構築時期

熊野古道と言えば石敷きの道をイメージする人は少なくないだろう。しかし、実際にはその大半が道幅1m前後の土の「地道」であり、石敷きが使われている場所は勾配が急な区間だけである。平らな場所はほとんどが地道で、雨が多いため路面が流れるなどして、歩行が困難な場所だけを石敷きしている。熊野古道の構造や構築時期を詳しく記録した資料は、残念ながら発見されていない。そのため、石敷きの形態が類似する他の地域の調査事例と比較検討した調査結果などから、その多くは江戸時



写真5 一人通るのがやっとの険しい山岳道



写真6 中辺路の「多富気王子跡」(社殿は熊野那智大社へ移設)



写真7 熊野古道の大半を占める土の地道

代に整備や改修がなされたものと推測されている。

1619(元和5)年、紀州藩は徳川家康の十男、頼宣が藩主となり、御三家の一つである紀州徳川家が誕生した。その領地は紀伊国全域と伊勢国の南部という広大なもので、附家老として水野家と安藤家が配された。中辺路と大辺路の本格的な整備は「熊野街道」として紀州藩の広大な領地を管理し、藩内の連絡

や統治をするために行われた事業なのである。これらはいわば「政治の道」であり、中辺路は紀州藩の公道として、大辺路は海岸線の街道として手掛けられたものと言われている。小辺路は山伏による修行のための道だけではなく、熊野の産物を奈良や大阪に出荷するために使われた「経済の道」だった。

江戸時代の文献にも「街道を整備した」としか記録されていないため、当時の整備事業は文書に残すほど大きなものとは捉えられておらず、作業した人々も日常業務として参加していたのではないかと推測される。熊野古道は世界遺産の登録によって参詣道として広く知られているが、本来は地元民の「生活の道」として造られ、集落を結んでいった街道なのである。基本的な施工方法は藩の作事方が指示したと思われるが、石敷きの方法なども地元民の経験則により整備され、補修も必要に応じてその時代の利用者が行っていたようだ。排水施設などはさほど多くなかったが、表土が雨で流されやすいことが地道の欠点である。そのため、古い時代のものは、水切りと

呼ばれる水の流れ路を横断方向に適度な間隔で設けて表土の流出を少なくし、新しい時代のものは、側溝を設けるなどして、耐久性を高めていた。

### 世界遺産を体感

紀伊半島の三つの霊場と参詣道とそれらを取り巻く文化的景観は、2004(平成16)年7月に「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産に登録され、国内外から多くの観光客が訪れている。熊野本宮大社の近くには、約1,800年前に発見された日本最古の温泉「湯の峰温泉」があり、その昔には熊野詣の湯垢離場として身を清め、長旅の疲れを癒した場所である。世界で唯一入浴ができる世界遺産「つば湯」は、小栗判官蘇生の湯として知られ、病を抱えた人々が少しでも早く熊野の神々のもとに辿り着けるよう、周辺には上皇などの参詣道とは違うルートも通っていたという。自然石をくり貫いた小さな湯船は、1日に7回色が変わると言われる神秘的な白濁の湯を湛えている。古の湯で心身を清め、熊野の神々を詣でてはいかがだろう。

熊野古道は世界遺産の保全に直接参加できる日本で唯一の場所であり、和歌山県では「道普請」というボランティアによる参詣道の維持・修復活動を実施している。種類の違う土を入れて古道を上から保護したり、流出した土に埋まった石敷きを掘り出すなどの作業を行う。土などの材料費を自己負担して修復作業を行うものだが、企業の社会貢献や小中高校の活動に留まらず、大手旅行会社のツアーとしても企画されており、個人参加のリピーターも多いようだ。また「世界遺産マスター」の認定制度があり、研修を修了し認定試験に合格した100名ほどの登録者が民間ボランティアのリーダーとして、参詣道の巡回や

修理が必要な場所の自治体への連絡、セミナーや講演などの広報活動を行っているという。

熊野古道は、古の人々の大自然を敬う心をつなぐ道であり、険しい山岳地での人々の暮らしをつなぐ道でもあった。現代でも多くの人々の手によって、魅りのパワーを後世へつないでいる。ぜひ熊野の地を訪れて、その素晴らしさを体感し、自分なりの楽しみ方を見つけてもらいたい。

#### <取材協力>

- 1) 和歌山県世界遺産センター

#### <参考資料>

- 1) 『世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」和歌山県保存管理計画』和歌山県 2005年
- 2) 『熊野参詣道王子社及び関連文化財学術調査報告書』和歌山県教育委員会 2012年
- 3) 『熊野古道と石段・石畳』三重県教育委員会 2007年
- 4) 『世界遺産 紀伊山地の霊場と参詣道』和歌山県 2012年
- 5) 『熊野古道 世界遺産<熊野古道>折りの聖地を歩く』三重県、奈良県、和歌山県 2013年
- 6) 『2007年全国歴史の道会議三重県大会』記念講演「熊野街道「伊勢路」の特質」塚本明 2007年

#### <図・写真提供>

- 図1 和歌山県世界遺産センター
- P16上、写真4 水野寿行 写真1、5、6 浅見睦
- 写真2、3 塚本敏行 写真7、8 大日方佳奈子



写真8 小栗判官蘇生の湯「つば湯」

## COLUMN

### 熊野の神々の使いとされる八咫鳥

八咫鳥は『古事記』や『日本書紀』にも登場します。神武天皇の東征の際には、天から遣わされた八咫鳥が熊野から大和まで導いたとされています。熊野三山では神の使いとして信仰され、3本の足を持つ大きなカラスとして描かれます。

日本サッカー協会のシンボルマークとしてもお馴染みですが、これは明治時代に近代サッカーの普及に尽力した那智勝浦町出身の中村覚之助に敬意を表し、八咫鳥がチームを勝利に導くようにとの願いが込められているそうです。

熊野三山の「熊野牛王符」と呼ばれるカラス文字の厄除護符は、裏面に誓約文を書く誓紙としても使われます。源義経が頼朝に忠誠を示したり、豊臣秀吉が五大老などに

秀頼に対する忠誠を誓わせたり、赤穂浪士も討ち入りを前に熊野牛王符に誓約したとされています。誓いを破れば八咫鳥が亡くなり、本人も血を吐き地獄に落ちると信じられてきました。現在でも、熊野本宮大社の神前結婚式の誓詞に貼付されています。



熊野本宮大社の熊野牛王符